

八田 房枝さん (86) 南町1

鳥取県出身の山下権太朗さん(昭和38年97歳で逝去、東川町名誉町民)の7人姉弟の長女として育ちました。

原始林の伐開で大量に切り出した木材を製材するため、東4号で山下木工場を経営、村中で栽培していたじゃが芋加工用のでんぶん工場も経営しました。

東川の区画整備の考え方を導いたのは、権太朗さんだったそうです。規則的な碁盤の目整備は、「昭和4年ごろ、京都に視察に行つて、京都を見習つて決めたんだよ」。

三線川の「山権橋」(東4号)は、事業家として活躍し、村の礎を築いた権太朗さんの名前にちなんで名付けたそうです。

房枝さんは、旧制第三尋常小学校に進み、旭川の北海洋裁実践女学校本科(のちに閉校)、職業訓練校洋服科で学びました。戦時中ひっ迫して夢をあきらめ、悔しい思いも、それでも終戦後は洋裁講習所を開いて、近所の主婦に教えていたこともありました。

夫、乃吉さん(平成24年、87歳で逝去)とは、公民館活動の中での出会い。「恋愛というより一緒に活動する同志だったの」。

終戦直後の1946(同21)年、各地で青年覚醒連



盟運動が始まりました。東川でも農村青年覚醒連盟が出来(後に東川村青年会)、17歳の房枝さんもその一員に。

活動は公民館づくり運動に発展し、翌年村役場内に初の公民館が開館。その公民館で乃吉さん(当時26歳)、房枝さん(当時22歳)は結婚式を挙げました。自ら手縫いのウェディングドレスを着て、伴奏のオルガンは友人が馬そりで運んでくれたものでした。公民館活動は、いつまでもキラキラと輝く青春の思い出になりました。

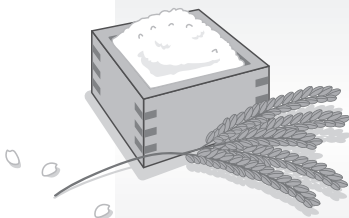
大阪出身、千葉育ちの乃吉さんは、終戦直後の北海道戦後緊急開拓事業の一員として東川に移住し村役場に勤務。公民館活動のかたわら、永山農業学校(現道立旭川農業高校)の分校誘致にも奔走しました(昭和24年開校、現道立東川高校)。

房枝さんはその後、1983(同58)年から15年間、図書館活動の一環として自宅に子どものための「こひつじ文庫」を作り、町内の女性グループ、ハーブの会も設立して昨年まで活動するなど、多方面に活躍してきました。

「『人として生まれたからには他者のために働け』がおじいさんの口癖だったよ。小さい時膝の上で教えてもらったことを、村のために、町のために—と思つて少しずつ働いた。それが文庫活動につながったのね。夫の協力がなければできなかった」。

俳句

青という青揃えたり秋の空
無垢の童の瞳に映る今年米
今年米椀に包まれ輝やけり
あれこれと独占したい秋日和
新米を両手で掬ふ幸せに
百歳の未来は無限星月夜
粒々と両手で振れる今年米
爽やかや村に過疎なし五連休
円相ににじむ青墨秋思かな
着任の新米教師句いけり
余命とは与わる命秋思かな
今だけは黄色い小鳥落葉かな
一生に一度っ切りの流星雨
村人の笑顔のしわや豊の秋
庭仕舞い根付ひよっこり見つきりて
野に朽ちる命のありて秋果つる
おでかけに誘つてみよう秋の空



若田 郁
本田 咲
佐々木 りえ
山内 みゆ
長谷川 きみゑ
小林 ろば
高橋 公花
杉山 ひろのり
保科 なほ
徳光 吐苦
杉山 りつ
小林 星来
横田 則子
若田 久
高瀬 潤
石澤 清宏
三島 智